

## 紙芝居「やまばとになったわらし」

日本野鳥の会ひょうご 親子バードウォッチングチーム  
松岡和彦 藤川久美子 豊川尚子 宮崎亮太

この昔話は、父子家庭のお百姓のお話です。主人公の男の子は、人の反対ばかりする子で、父親は、激しい野良仕事と一人息子への気苦労とで病に倒れる。しかし、父親の臨終に際し、改心した子どもは、父親が「川のそばに埋めてくれ」と言うのを、言葉通りに川に埋める。しかし、父親の真意は、山に埋めてほしいと言うものだった。子どもは雨が降りそうになる度に、父親の墓が川に流されはしないかと心配で畑仕事も手につかず、畑と川とを行ったり来たりしているうちに、ついに「テテ（父）ポッポー」と父を慕って鳴きながら飛ぶやまばとになってしまう。

孤児として、生き抜いていかなければならない厳しい現実には、子どもはやまばとになったことで、却って救われたのかも知れません。やまばとというのは、鳥類図鑑には「キジバト」と言う標準和名で載っています。大きさはヒヨドリとカラスの中間位です。少し木々が繁っておれば、街中の公園などでもいます。やはり「テテポッポ」と言う鳴き声でも見つけることができます。各地にこの昔話に似た話があるようです。主人公が変身するのは、トビやフクロウであつたりします。昔話には、動物や鳥などが登場することが数多くあります。昔の人々の生活が、それだけ、豊かな自然に恵まれ、動物や自然が身近で、生活とも結びついていたと言うことでしょう。

子どもたちが物語の主人公の動物に想いを寄せられたなら、後に、その動物が自然の中にいることを発見したなら、その動物がいとおいしい存在になるのでは、と私はひそかに期待しています。子どもの頃に、そのような気持ちが生じることが動物保護、自然保護の考えが芽生える原点ではないか・・・この昔話の紙芝居を作った動機です。